



赤松の機を模った家主ご一家。右端は設計した
未来空間の田村氏と三次氏。

世界にひとつだけの

我が家

懐しさと生きる

赤松が家族を見守り続ける家

リフォームのよさ。それは、住まい手のこだわりを大切にされた家作りができることにある。新築のようにお仕着せされたものではなく、ひとつひとつの細部まで作り込むことができれば、世界でただひとつの我が家をつくることのできるのだ。

何年も止まった計画

純和風の家に立つ赤松。その幹が無残に倒されたのを見たとき、施主の目には涙が浮かんだ。だが、リフォーム後、和室の壁に変わらぬ赤松の姿が浮かび上がったとき、温かい思い出が甦った。

東京都中野区にあるYさん宅。35年前に建てられた木造2階建ての純和風住宅は、風格はあったものの、日の光が差し込みにくく薄暗かった。独立した息子夫婦と一緒に住むことになったのを機に2世帯住宅にリフォームすることになった。

ご主人が希望したのは、地震が起きても心配のない丈夫な家。さらにご主人と息子の2台の車を並べておける広い駐車場も欲しかった。一方、奥様が望んだのはベランダガーデンが似合いそうな明るい洋風の雰囲気だ。さらに、建築関係の仕事についている息子夫婦はシンプルモダンを希望した。

これだけ好みバラバラだと、なかなか計画は進まない。数社の大手ハウスメーカー系リフォーム会社がプランを提案していたが、どれも今ひとつ気に入らない。

「やはり建て替える方がいいの

か……」半ばあきらめかけていたときに、息子が探してきたのが未来空間(東京都新宿区)の田村氏だったとYさんは言う。

「社名も聞いたことがないし、正直なところ半信半疑でした。でも、私たちの要望にこたえられるよう真剣に考えてく

れました。その真面目な対応に好感を持ったのです」

提案も他社と違っていい。車2台が並んで入るようという要望に対して、他社は和室の目の前に駐車場を作る案を出した。しかし、田村氏は違った。

「はじめは和室の前に広い駐



中央の柱をエントランス風に
したリビング



昔のリビング。あまり
明るくはなかった

車場を作ることも考えました。しかし、ご主人から話を聞いていくうちに、この和室をとでも大切にしていられたいことに気づきました。そこで、和室を保存する方法を提案したのです。」

思い切つて玄関をつぶして駐車場を作ることを提案。和室はそのまま残し、茶室の場所にリビングを作るプランを出した。結果的にこれが決め手となった。

駐車場の屋根は白いアール形のひさしが張り出した造形。白い壁とレンガがプロヴァンス風の雰囲気を出す。

リビングも奥様の好みに合わせてホテルのような洗練された

雰囲気を実現した。ここは前は狭い茶室だったが、天井を2800ミリまで高くして開放感を持たせた。構造上撤去できない梁の部分には間接照明を取り付けた。梁を隠すのではなく、意匠の一部のように見える工夫だ。リビングの中央に残さざるを得なかった木の柱は、木板でくんでエンタシスを模して洋風に仕上げた。

また、玄関は駐車場と同じ雰囲気のアールで統一。手渡きの越前和紙をアクセントに、重厚感ある雰囲気を作り出した。

思い出の松

ただし、すべてが順調だったわけではない。一番の問題は玄関に生えていた赤松だった。この家にはもともと大きな赤松が植えられていた。高さは屋根と同じくらい。幅も10メートルという大振りなもので、毎年植木屋さんに手入れしてもらっており、とても大切にされていた。それを今回、切り倒さなければならなくなったのだ。

「子供たちの入学式や卒業式など、何かあればこの松を背景に記念写真を撮りました。その松を切るのは、本当に辛かったですね。」(Yさん)

ある日の早朝、長年家を見守

襖を開けるとそこには「赤松」が現れる粋な仕掛け

ここがポイント



つてきた赤松は切り倒された。それも、ご主人が留守のときに。「業者さんも私が目の前にいる時には切れなかったのです。朝、家を見に来たときにはもう倒されていました。でも、その切り株からヤニが出てきていたんです。光っているヤニを見たとき、それが私には松の涙に見えました。」

無残な切り株を眺めながら、目頭が熱くなるのは止められな

- 設計・プラン
住宅リフォーム研究所 未来空間
新宿区四谷4-6-1-907
03-5363-3931
- 施工
大栄工業

きれいに生まれかわった外観。プロヴァンス風の趣は奥さまのお気に入り



もとの家のシンボルだった赤松。ご主人がとても大切にしていた思い出の松だ



手造りの一枚和紙をポリカーボネートで挟んで飾った玄関コーナー



玄関にも間接照明を取り入れて高級な雰囲気



DATA ●家族構成/親夫婦・息子夫婦・孫1人 ●建て方・構造・階数/一戸建て・木造・2階 ●改築面積/140㎡ ●施工金額/1500万円



思い出のつまった和室。毎年、正月には親戚が集まる

かった。そして、そんな施主の苦悩を田村さんも感じていた。「松は切ったけれど、何か残せたら・・・」

襖の向こうに

工事の後半になったある日、田村さんはYさんを和室に呼んだ。「ちょっと見てもらいたいものがあって・・・」

そう言いながら田村さんは襖を開けた。瞬間、Yさんは言葉が出てこなかった。襖2枚を開け放った奥には、あの日の赤松

の姿が浮かび上がっていたのだ。田村さんがしたのは写真の転写。赤松の写真をもらって、1間分のクロスに拡大して転写したのだ。施主への心ばかりのプレゼントだった。

今年の正月、Yさんの家には親類縁者がいつものように集まった。きれいに生まれ変わった家を見て、みな驚きもあったが戸惑いも感じていた。だが、和室が前とまったく変わらな残っていることを見て、ほっと安堵のため息がひろがったという。

「久しぶりに来た姉が、和室も元のまま、赤松もあって、変わってなくて安心した。って言っていました。それを聞いたとき、昔のままに残っていてよかったと思いました」(Yさん)

田村さんは言う。

「リフォームというのは、修繕することだけではないんです。施主の今までの暮らし方や人生を大切にしながら快適さを付け加える。いわば未来と過去をつないで、その人らしい家にするってことなんだと思います」

その言葉通り、Yさんの家は思い出を大切にしながら家族みんなが笑顔で暮らせる家になった。

赤松が見守る、世界でただひとつの素敵なお家になったのだ。